琉球大学学術リポジトリ

離島における平和教育教材開発研究1　―戦争遺跡"西表島船浮・対馬要塞跡"の実態調査から見る教材の可能性―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2008-02-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山口, 剛史, 田中, 洋, 島袋, 純, 全, 炳徳, 近藤, 寛, 松元, 浩一, Yamaguchi, Takeshi, Tanaka, Hiroshi, Shimabukuro, Jun, Jun, Byungdug, Kondo, Hiroshi, Matsumoto, Koichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3468

離島における平和教育教材開発研究Ⅰ

―戦争遺跡“西表島船浮・対馬要塞跡”の実態調査から見る教材の可能性―

A Study of Teaching Materials Development about Peace Education in Remote Islands
―Possibility of Teaching Material seen from Investigation of Actual Conditions of War-related Sites “Iriomote Island Funauki and Nagasaki Tsushima Fortress Ruins”―

山口剛史*・田中　洋*・島袋　純*・全　炳徳**・近藤　寛**・松元浩一**

Takeshi YAMAGUCHI*, Hiroshi TANAKA*, Jun SHIMABUKURO*, Byungdug JUN**, Hiroshi KONDO** and Koichi MATSUMOTO**

１．はじめに

戦後60年を過ぎ、平和教育（ここでは、とりわけ近代日本が経験した15年戦争を題材として戦争の実相・意味から平和を考える平和教育）には多くの課題が存在している。その一つは、これまで大事な視点としてすすめられてきた「戦争体験者」の声を中心とした学習方法は、体験者の高齢化とともに日々困難となってきていることである。体験者より直接戦争体験を聞き取りながら、戦争の実相について深めていく学習方法は、平和教育の中で重要視されてきた。そこには、聞く者に戦場の光景をリアルに想像させ、戦争の悲惨さを伝える力があったからである。また、一人一人の人間の意識や命、身体に何が起こるのかということを考えることができる素材でもあった。

沖縄においては、これら体験者の語りを記録する運動が市町村史を中心に進められた。これには、体験の継承という課題とともに別の理由があった。沖縄戦は、住民を巻き込んだ激しく長い地上戦のため、史資料は日米両軍の記録のみであり、沖縄住民がどのように戦火を生き残ったのか、どのような住民犠牲があったのかを、当時の資料から見ることはできない。そのため、住民にとっての沖縄戦を明らかにするためには、戦争体験の記録は不可欠な作業であった。

沖縄における平和教育は、沖縄戦研究・戦争体験の記録活動と一体となりながら教材化・学習がすすめられており、現在に至るまで体験記録の作成（文字、音声、映像を含む）が行われ、教材化なども実施されている。[和光小学校・和光鶴川小学校「沖縄に学ぶフォーラム2006」委員会2006]

もう一つ重要な平和教育の素材が存在する。戦争遺跡（戦跡）である。近年、戦争遺跡は、調査研究が進み多くの成果が発行されている。戦争遺跡は、その研究団体である「戦争遺跡保存全国ネットワーク」によれば、「『近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内国外で形成され、

* 琉球大学教育学部　Faculty of Education, University of the Ryukyus
** 長崎大学教育学部　Faculty of Education, Nagasaki University

かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のこと』である」[1]とされている。

沖縄県においては、その地上戦という特徴からか、沖縄戦学習が戦場であった現場に立つことで、戦場の実相をつかむことができるとされ、ガマ（沖縄方言で鍾乳洞等の自然洞窟）の中に実際に入り当時の様子を確認する学習方法がとられてきた。戦場の追体験をする場として戦争遺跡が活用されてきた。

しかしこれらの遺跡は開発の中でその多くが姿を消してきたのも事実である。沖縄戦研究者からなる「沖縄戦を考える会」は、1977年より、戦争遺跡の保存を要請し、保存・活用に関する運動をすすめてきた。その後、1990年に南風原町が町の文化財として、「南風原陸軍病院」を戦争文化財として指定、保存活用に向けた調査も始まることとなった。1994年、「沖縄平和ネットワーク」が、平和ガイド・戦跡調査等をすすめる団体として立ち上がった。1997年には、全国組織である「戦争遺跡保存全国ネットワーク」が、広島、長崎、松代、日吉台など全国の戦跡保存・活用をすすめる研究団体のネットワークとして結成された。[戦争遺跡保存全国ネットワーク2004]

一方、全国的な行政の動きとして、1995年に文化財指定基準改正が、広島の原爆ドームの国の史跡に指定されるに伴い、実施された。これにも多くの学会・市民団体等の要請活動があった。[十菱・菊池2002] その後文化庁は、1996年より「近代遺跡の全国調査」を開始し、1998年の所在調査が終了、それ以後は詳細調査が実施されている。その結果、各県市町村において、戦争遺跡を含む近代遺跡・近代化遺産・建築物の文化財指定が進んでいる。[戦争遺跡保存全国ネットワーク2004]

沖縄県においても、沖縄県立埋蔵文化財センターを中心に「沖縄県戦争遺跡詳細調査」が実施された。戦跡考古学と言われる考古学をベースにした測量調査によって、その実態が正確に記録されることとなった。2006年3月までにその報告書が、「南部編」「中部編」「北部編」「本島周辺離島及び那覇市編」「宮古諸島編」「八重山諸島編」と6冊発行されている。

このように、戦争遺跡を活用した平和教育の重要性は、研究成果の充実とともに高まっていると言える。あの戦争をリアルに認識していくための"場"である戦争遺跡は、戦争体験者の声とともに、保存・活用すべき重要な素材である。しかし、戦争遺跡が"場"としてさえあれば、それで平和教育が行えるのかと言えば必ずしもそうとは言えない。戦争遺跡の実態の正確な把握(位置、規模の実測データ等)、日米双方の軍史料等の検証、住民体験記録との照合が不可欠である。そうすることで、「戦争遺跡をどう位置づけるのか」「具体的戦争遺跡から見える戦争の実相」が明らかになり、子どもたちとの学び方も明確になるはずである。

本稿では、このような観点のもと、離島における戦争遺跡調査から明らかになった戦争遺跡の実態を取り上げ、教材開発研究の第一歩とする。具体的には、八重山諸島西表島の船浮要塞を取り上げる。船浮要塞は、地上戦闘がなかった八重山の中でも早期に要塞建設が実施され、多くの住民が徴用され、住民と軍隊の関係を見ることができること、現在においても多くの遺構等が残っておりその全体像を明らかにすることができること、国境に接する地域であり輸送路としても重要な地点であったことなどからである。

また、比較対象として、長崎県対馬の要塞をあげる。こちらも同様に国境に接する地域であり、多くの要塞が日清・日露戦争時から建設され、15年戦争時にも新たに建設・強化されており、船浮よりも長年、「国防の要所」とされてきた。そのため、対馬の位置づけならびに戦争遺跡の実態を正確につかむことは、船浮要塞の位置づけを考えるだけでなく、対馬の平和教育を考える素材としても活用できるものと捉え、調査を実施することとした。

---

[1] 戦争遺跡保存全国ネットワーク編著『保存版ガイド　日本の戦争遺跡』平凡社2004　P.23

2．西表島船浮要塞遺跡に関わる先行研究とこれからの研究課題

今回の研究の土台には、大きく三つの先行研究が挙げられる。一つ目は、城間良昭・沖縄県教職員組合八重山支部西表連合分会（以下西表連合分会と略）社会科分科会による西表の戦争の掘り起こしと教材化である。二つ目は、竹富町史による住民体験記録及び鉄田義司日記の発行である。三つ目が、沖縄県立埋蔵文化財センターによる沖縄県戦争遺跡詳細分布調査報告である。それぞれの成果は以下のようなものである。

一つ目の城間良昭は、1983年より1988年まで西表島の小学校に勤務した。1984年～1987年の4年間、西表連合分会において「地域教材をどう位置づけ実践したか―西表島の戦争―」として共同研究をすすめている。この実践の成果は、歴史教育者協議会機関誌「歴史地理教育」408号（1987）に掲載され、最終的には「田港朝昭編『平和教育実践選書４　沖縄戦と核基地』桐書房1990」に授業書としてまとめられた。城間らが指摘しているように、「これまで『沖縄戦』というと、すぐ沖縄本島中南部の激烈な地上戦闘が主に語られるばかりで、八重山、その中でも西表島の戦争の事が、歴史の表で語られる事はほとんどなかった」[2] のである。それは平和教育の場でも同様であった。それには、「かつてこの戦争体験記録が、島の人々の手で調査され、まとめられた事はなかった」[3] ことが大きいとも言える。八重山地区の戦争マラリアに関する調査は、［沖縄国際大石原ゼミナール戦争体験記録研究会1983］などの大きな成果はあったが、西表島における住民体験記録は、石垣市市史編集室編の「市民の戦時戦後体験記録第一集、二集」が発行された程度であり、西表島での住民体験は、その中でも数編を数える程度であった。そんな中、平和教育をすすめる教師自らが住民体験記録をすすめたこと、それだけでなく「鉄田義司日記」を鉄田氏との出会いから入手し、いち早く紹介した［城間良昭1987］ことは、船浮要塞の全体像を解明するうえで大きな役割を果たしたと言える。

二つ目の竹富町史の戦争体験記録は第十二巻資料編として1996年に発行された。本巻は、住民体験記録を掲載するだけでなく、全町悉皆の「戦災実態調査」を実施、集落ごとの被害状況や日本軍による土地・家畜等の供出状況についても調査しまとめている。竹富町における沖縄戦の特徴（砲弾・爆弾・銃弾などに当たって死ぬのではなく、マラリアによっての死亡が多いこと）を具体的につかむことができる資料となっており、住民体験記録から船浮要塞など日本軍と住民の関係や徴用、動員などの実例を把握することができるものとなっていることが大きな成果である。前述した「鉄田義司日記」は、住民体験記録の記述に活用されただけではなく、その全体が「竹富町史資料集①鉄田義司日記―船浮要塞重砲兵連隊の軌跡―」（以下、鉄田日記と略）として、2000年に発行された。本書は、住民体験記録だけでは見えない要塞の実相を、具体的に語る資料として、船浮要塞の全貌を明らかにしていくうえでは欠かせない資料である。

三つ目の沖縄県戦争遺跡詳細分布調査報告は、上記の二つの部分をより実証的に検証する作業となった。城間らの調査の中でも内離島の砲台跡の調査等実施されてはきた。筆者の一人山口も西表島勤務[4] の際には、現地を調査する機会を得ていたが、要塞全体を網羅した専門的調査を実施することはできなかった。全県的に実施されたこの調査で、可能な限り測量が実施され、実測図が作成されたことは、要塞の規模や目的、機能を科学的に把握する上で大きな成果をもたらした。それだけでなく、［伊波・山本2006］では、詳細調査において発見した遺跡について、「鉄田日記」、「竹富町史」との整合性を検証する研究をすすめている。

このような成果を受け、引き続き研究をすす

---

[2] 『テーマ設定の理由』沖教組八重山支部西表連合分会社会科分科会「第5次西表地区教育研究集会資料『西表の戦争　第１集』」1985

[3] 前掲、西表連合分会1985

[4] 筆者の一人（山口剛史）は2002～2003年に西表島船浮小中学校に勤務

めることが求められているが、この点について［伊波・山本2006］は、今後の調査研究の方向性を「船浮要塞に関する戦争遺跡から見た今後の課題としては、まず未だ確認されていない戦争遺跡の確認を地道に続けていく必要性が掲げられる。今回の分布調査では、船浮要塞司令部跡や外離島北側に構築したとされる兵舎跡など、『鉄田日記』等で記載されていた施設を確認することができなかった。（中略）さらに今回で確認した戦争遺跡をより詳細な調査を行うことも、船浮要塞の実態を明確にしていく上で当然ながら必要な作業となる」[5] としている。さらに「船浮要塞についての考察方法では、確認した戦争遺跡を地域の文献資料から主に考察していく事に重きを置いたため、船浮要塞と同時期に構築された臨時要塞施設（沖縄本島中城湾要塞等）との比較や、大正期に本格的に整備された要塞施設〔奄美大島瀬戸内町に建設された奄美大島要塞（図版13）、小笠原諸島父島に建設された父島要塞等〕との比較など、船浮要塞が旧日本軍、あるいは太平洋戦争においてどのような位置づけであったのかを大局的に考察する視点が欠けていた事は、筆者の反省材料と同時に今後の課題としたい」[6] と述べ、日本全国の要塞の比較検討の中で船浮要塞の位置づけを検討することの必要性も指摘している。最後に、「他の分野、あるいは研究者から見る視点で船浮要塞を調査・研究することによって、新たな実態、成果を導き出してくれるのではないかという期待も込めたい」と締めくくっている。

これらの指摘を受け、今後船浮要塞の調査研究の課題を以下のように整理したい。

① 引き続き遺跡・遺構の実態調査を続けることで、船浮要塞の個々の施設の現状を明らかにすること

② 「鉄田日記」ならびに「鉄田日記解説」、「石垣島方面陸海軍作戦」など、戦史史資料の不確実な点がある。これらについて、戦史研究の面から史資料の整理を行い、戦争遺跡との照合をより確かなものにすること

③ 船浮要塞の位置づけについて、要塞建築の面からの特徴、地理的年代的位置の特徴など、考古・建築・軍事史それぞれの研究成果をふまえ明らかにすること

④ 船浮要塞の存在が、一人一人の住民・兵隊・軍属にとってどのような意味を持っていたのかを、住民体験記録・証言など一人一人の体験を中心にしながら、訓練、徴兵、徴用や供出、ひいては人の生死から明らかにすること

⑤ これらのことから、平和教育への活用の方向性、「離島における沖縄戦の特徴」を具体的な“場”で学ぶための教材・素材を開発すること

本稿では、以上の視点に立ち、まずは①について［伊波・山本2006］の成果を確認し実地調査を実施し、②の「鉄田日記」の分析を実施し、そこから再度船浮要塞の経過について整理した。③について対馬をとりあげ現地調査を実施し、合わせて④の視点である体験記録についても文献収集、現地での聞き取り調査を実施した。

3．新たに確認した船浮要塞関連遺跡群

今回の調査において、［伊波・山本2006］のデータに新たに付け加えることができたのは、以下の３カ所であった。

① サバ崎砲台跡（図１⑬の位置）

サバ崎は、船浮要塞配備においては、要塞建設時には第4区、サバ崎守備隊が配備され、38式野砲が２門設置されたとあり、その内の一つであると考えられる。

場所は、サバ崎の最北端に位置し、ちょうど谷を登り切った地点にコンクリートで構築された砲台が建築されていた。現在は、アダンに覆われて詳細な測量をすることができなかった。砲台にあがるまでには、コの字型の弾薬庫らしき石積みや砲台跡に至る道も残っている（写真１－２）。

---

[5] 伊波・山本2006　P.100
[6] 同　P.101

写真１．サバ崎砲台跡

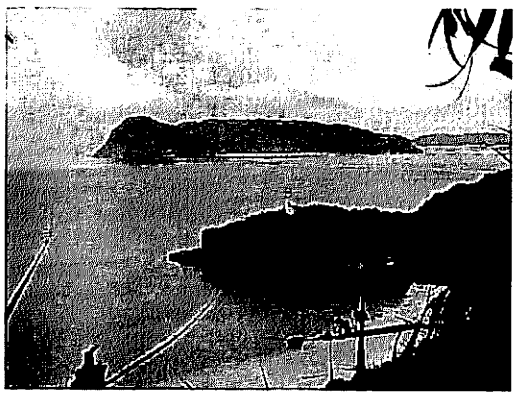


写真２．砲台跡より外離島を望む

写真３．山頂付近の基礎部分

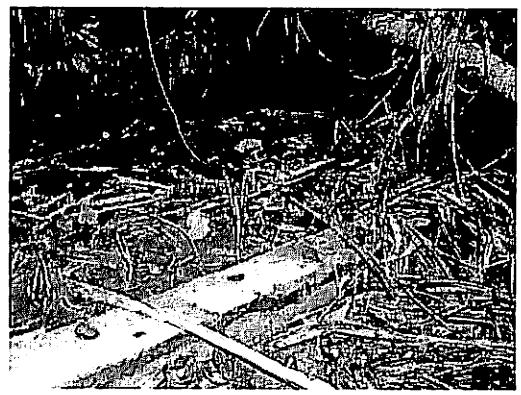


写真４．一段下のコンクリート基礎

② サバ崎兵舎跡（図１⑭の位置）

サバ崎砲台に至る谷を降りた少し平らな場所に兵舎跡と考えられるコンクリートの基礎を見つけることができた（写真６）。

サバ崎守備隊の配備のものとも想定されるが、［伊波・山本2006］が指摘している兵舎からは小さくはあるが谷を一つ越えた場所にあるため、同一施設とは考えにくい。そのため、守備隊撤退後の特別警備隊による構築物であるのか、両方とも守備隊のものかなど、今後より詳細な調査が必要になると思われる。

③ 崎山監視所（図２⑳の位置）

最後が、崎山の監視所（望楼）である。この施設は海軍の施設で崎山、網取に空襲警報を出す役割も果たしていた。空襲によって破壊されたと住民体験記録には出てくる。山頂と一つ下の段と両方にコンクリートの基礎が確認できる(写真３－４)。

４．「鉄田日記」、戦史研究に見る船浮要塞の変遷

ここでは、二つの点から船浮要塞の実態にせまることとする。まず、船浮要塞建設までの経緯を、全国の同時期の要塞建設と合わせて概観し、船浮要塞の位置づけを述べ、「臨時要塞」として性格を明らかにする。次に、「鉄田日記」に見る船浮要塞の変遷、とりわけ部隊の配置と陣地構築の変遷を整理し、今後の実態調査の手がかりとしたい。可能な限り、現在見つかったものについても再検証を行い今後の調査で確認すべき点を指摘した。「日記」は、要塞重砲兵連隊に関わる記述がほとんどであるため、その他の部隊に関する記述はほとんどない。そのため、防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面陸軍作戦」「戦史叢書沖縄方面海軍作戦」を参照し、これらの部隊の移動についても、明らかになっている点について記述した。

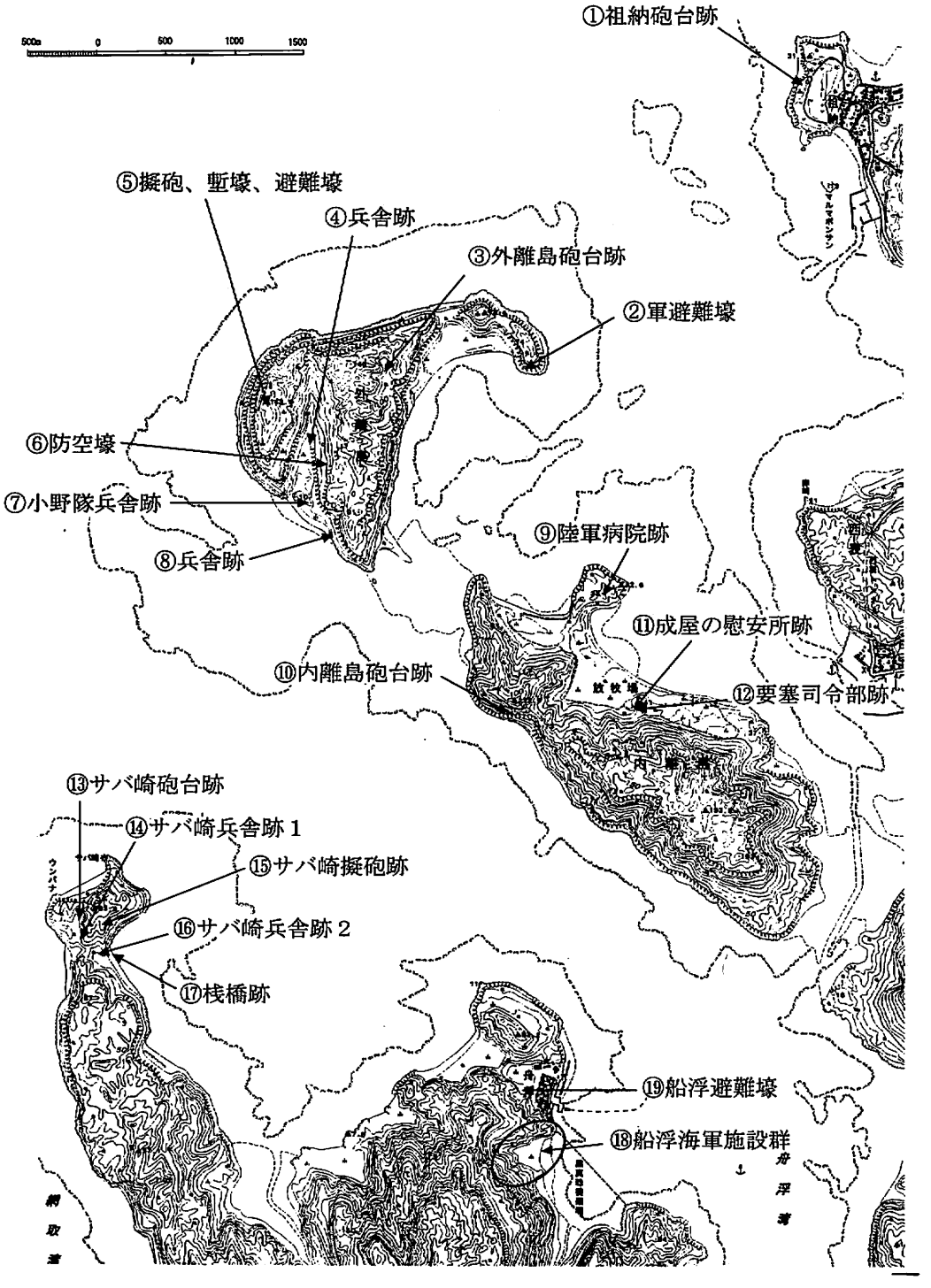


図１．船浮要塞関連遺跡の分布地図（1）

国土地理院25000分の１地形図、「船浦」（平成17年11月１日）を元に筆者が作成した。［伊波・山本2006］の分布図の位置に、今回の調査において明らかになった地点を付け加えた。船浮集落以外は、住民避難壕は割愛し、新たに番号をふり直したため、［伊波・山本2006］とは番号は異なる。

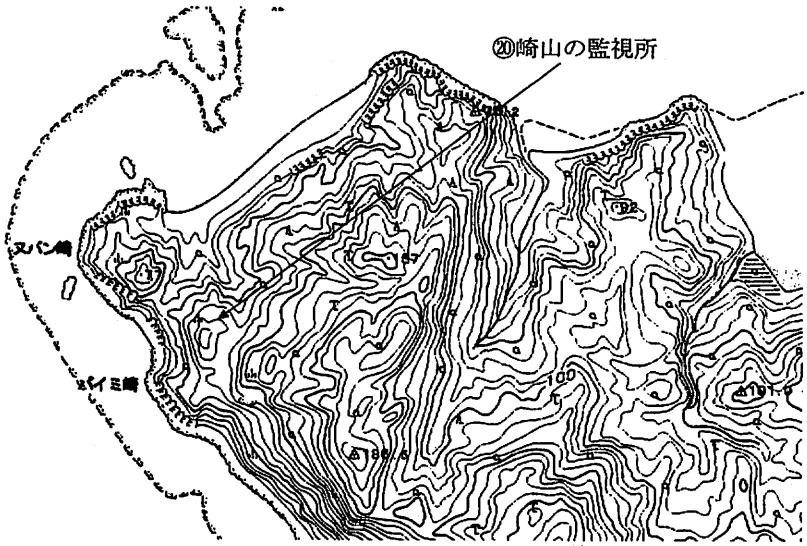


図２．船浮要塞関連遺跡の分布地図 (2)

国土地理院25000分の1地形図「ウビラ石」（平成17年10月１日）を元に筆者が作成した。[伊波・山本2006] の分布図の位置に、今回の調査において明らかになった地点を付け加えた。船浮集落以外は、住民避難壕は割愛し、新たに番号をふり直したため、[伊波・山本2006] とは番号は異なる。

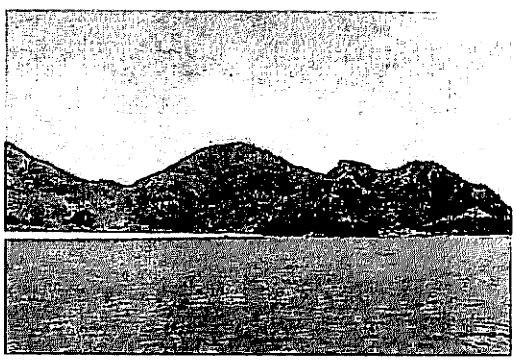


写真５．崎山の監視所を望む。真ん中の山の頂上に監視所はある

写真６．サバ崎兵舎跡

(1) 船浮要塞建設までの経緯

船浮要塞の建設に関する経過を「沖縄方面陸軍作戦」は、「南西諸島方面防備の由来（注）明治以後の軍事について記述する」[7] の中で、次のように述べている。

「大正八年ころから、有事の際は北海道、台湾、南西諸島に臨時要塞を建設することとなり、大正十一年度から中城湾（沖縄本島）、狩俣（宮古島）、船浮（西表島）の臨時要請建設計画などが作成された。

しかし、ワシントン条約廃棄後もこれらの施設は着工されず、ようやく開戦直前の昭和十六年（一九四一年）七月に中城湾及び船浮の臨時要塞建設命令が発せられ、八月に着工し十月に工事を終了した。

中城臨時要塞及び船浮臨時要塞には十六年九月要塞司令部、要塞重砲兵連隊、陸軍病院などの編成が下令された配備につくことになった」[8]。

このように、船浮要塞の建設は、1944年３月の第32軍創設から始まる沖縄戦準備とは性格の

[7] 防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社1968　P.14
[8] 前掲　P.15-16

異なるものである。船浮湾は「その深い入り江が艦隊の前進基地として適地であることが早くから注目されていたとされ、1882（明治15）年から3度にわたって来島した農商務省・田代安定、1886（明治19）年に視察した内務大臣・山県有朋、1904（明治37）年連合艦隊司令官・東郷平八郎などが視察し、「我が国の南門」として要塞または軍港としての整備の必要性が出されていた。[竹富町史1996]

さらに、海軍も同様に南西諸島の戦略的地位を考えていた。「沖縄方面海軍作戦」は、「南西諸島の戦略上の役割には二つのことが考えられた。その一つは、艦隊の前進基地としての役割であった。（中略）また沖縄島の中城湾と澎湖島は、対比島作戦部隊の発動基地として考えられ、これらは前述の緒戦における比島攻略作戦にその役割を果たすものと考えられた。今一つの役割は、海上交通上の要地という考え方である。南西諸島は、南方からの重要物資の輸入や、わが補給作戦などにおいて、南方航路の哨戒や護衛のための中間基地として重要であるとかんがえられていた」[9] としている。特に海上交通の要地としての防備の必要性は、アメリカの反攻が強まる中で、南西諸島の防備対策という形で強化され、①離島に対する防備、②対潜水艦の護衛作戦、対潜作戦、③米軍の攻略に向け陸軍部隊の増強を含めた防衛措置［沖縄方面海軍作戦1968］と変遷することになった。

このような背景の中、船浮要塞は地理的位置ならびに港湾としての適性から、臨時要塞建設計画の候補となったと考えられる。建設前に、陸軍兵器本廠の作成した「昭和11年度要塞所要（増加配属）兵器整備計画ニ関スル報告」によれば、「父島、奄美大島が要塞所要兵器、厚岸、宗谷、室蘭、中城湾、船浮、高雄が臨時要塞所要兵器、東京湾、由良、豊予、下関、佐世保、対馬、長崎、壱岐、舞鶴、津軽、永興湾、鎮海湾、旅順、基隆、澎湖島が要塞増加配属兵器」[10] とランクを分け、配備計画したい大砲等の種類や砲弾の量、各地までの所要日数を報告している。ちなみにこの計画では、船浮臨時要塞の配備計画は以下のようになっている。

「西表島祖納…斬加式十二速加『四』一八トン
外離島…斬加式九速加『四』一八トン
内離島成屋…四一山砲『四』一八立方米
臨時高射砲『二』二八立方米
西表島サバ崎…三八野砲『四』五六立方米
内離島成屋…要塞防御用爆薬三トン
西表島祖納…〇〇〇電燈四七立方米[11]
…固定無線電信機四六立方米」[12]

実際の建設では、これだけの大砲が配備されることはなかったが、砲台の設置場所などの基本的性格はすでにできあがっていたことが伺える。

その後、「昭和15年臨時要塞建設ニ関スル件」からは、参謀総長と陸軍大臣との臨時要塞建設に関するやりとりがあり、「昭和十五年度幌筵、宗谷、根室、室蘭、中城湾、狩俣及船浮臨時要塞建設要領書別冊ノ如ク定メ照會ス　追テ異存ナクハ関係ノ向ニ達相成度又別冊ハ用済後返戻相成度」[13] とあり、南北の国境地帯の沿岸を中心に要塞が建設されていったことが伺える。

このように、船浮要塞は、1941年のアジア・太平洋戦争への拡大のプロセスにおける陸軍の作戦の中に位置づけることができるであろう。要塞建築の点からも、それらの地域の遺跡と合わせて見ていくことが重要になると考えられる。

次に、実際の船浮要塞の建設のプロセスについて述べておきたい。前述したように、船浮要塞の建設は、７月建設命令、８月着工、９月部

---

[9] 防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面海軍作戦」朝雲新聞社1968　P.15-16
[10] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01005449600（第１画像目）、軍事機密大日記、昭和11.３「陸機密大日記第１冊２/２」（防衛庁防衛研究所）
[11] 文字が潰れているため判読不明
[12] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01005449600（第11画像目）、軍事機密大日記、昭和11.３「陸機密大日記第１冊２/２」（防衛庁防衛研究所）
[13] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01007727600（第３画像目）、軍事機密大日記、昭和14.10－11「陸機密大日記第２冊２/２」（防衛庁防衛研究所）

隊編成、10月工事終了と記述されているが、実際には住民から土地を接収し要塞建設は実施されており、そのやり方には強制的なものがあった。また、時期の問題についても少しズレがあるようである。昭和53（1978）年３月沖縄県総務部総務課より出された「旧日本軍接収地調査報告書」（旧日本軍が接収し、現在、国有地として取り扱われている土地の調査報告書）において、聞き取り調査が実施されているが、それによれば以下のようである。

「施設の建設は陸軍省築城部本部船浮臨時支部長陸軍大尉安田喜市が昭和16年５月頃軍部の機密保持の観点から、村当局や地主への事前通告もなく、軍事機密や各種施設建設の資材を満載した軍用船を仲良港に入港させ、丸三興業及び東洋産業（炭坑）のダンベー船を利用し成屋、外離、サバ崎、祖納の各地域に機器を陸揚（地元住民を動員）し、ただちに要塞の建設を開始し、監視兵を配備地元住民の立入を禁じ、軍と村の関係職員が台帳と図面を照合した後、関係者を西表国民学校に集め安田支部長から買収について要旨説明が行われた」[14]。その上で、「土地買収は村長を代理人として全て村長へ委任するようにとの命令があり、土地売渡承諾書を徴し土地買収作業を完了した」[15]と、軍の命令により有無を言わせない形での接収だった。土地代も現金は２～３割に過ぎず、残りは国債の強制購入であった。

ここからは、時期が５月であり、二ヶ月近いズレがある。なお、[大田静男1996]によれば、1941年６月５日に仲良港に入港とある。いずれにしても、船浮要塞の建設は夏前から実施されていたことは間違いないようである。前述の報告書資料に証書等の書類の複写が掲載されているが、日付は９月11日付の文書となっている。契約人数と面積は、82名で1,390,132坪である。

(2) 「鉄田日記」にみる要塞の変遷

まず、簡単に「鉄田日記」の性格について触れておきたい。これは、船浮要塞重砲兵連隊第一中隊の少尉として船浮要塞建設後すぐに配属された部隊の将校の日記である。彼は、その後連隊本部付将校、第二中隊中隊長として、終戦まで外離島、内離島、石垣島で過ごした。終戦を迎え復員するまでの４年あまり（正確には、1941年10月２日～1945年12月４日）の記録となっている。この「日記」は「船浮要塞重砲兵連隊での軍隊生活の様子や、軍務等を記してあり、それは個人のレベルを超え、極めて資料的価値を持ち、社会性、公益性に富んでいて『八重山戦』の一断面を浮き彫りにしてくれる。（中略）この種の資料は数年を経て、過去の体験等を振り返って書く『回想録』や『回顧録』とは異なり、“同時代”の“現在”を記しているため、事象の信憑性は高く、事実誤認が少ない、ということに価値を見い出すことができよう」[16]と解説では、その性質と価値を認めている。また、当時、鉄田自身が撮影した写真も同時に存在し、その中から当時の配備状況や陣地の様子を散見することもできる。

船浮要塞を重砲兵連隊の配備を中心に区切った場合、以下のように分けられるであろう（表１参照）。

① 初期配備時期（1941.10～1942.10）
② 編成替えし外離島への集中期
　（1942.10～1944.９）
③ 小野隊を残し石垣島へ移動
　（1944.９～敗戦）

① 初期配備時期（1941.10～1942.10）

①の時期は、前記に記述した要塞建設が開始され、最初に配備がおこなわれた時の部隊配備の状態である。ある程度、築営隊が設営した状態で上陸し整備を始めている。ここで確認できることは、10月13日の時点で外離島には、砲台

---

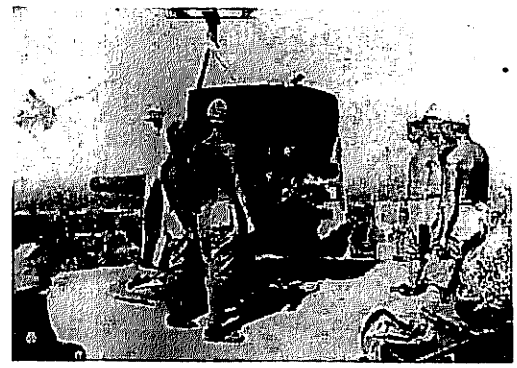
[14] 沖縄県総務部総務課『旧日本軍接収地調査報告書』沖縄県1978　P.215
[15] 同上
[16] 竹富町史編集室『竹富町史資料集①鉄田義司日記―船浮要塞重砲兵連隊の軌跡―』竹富町役場2000　P.７

表１．「鉄田日記」に見る船浮要塞部隊配備の変遷

年月日	部　隊　編　成	装　　備
1941（S16）年 10月13日	１区（内離島）要塞司令部 要塞重砲兵連隊本部 船浮陸軍病院 六五要塞歩兵隊 高射砲隊	高射砲（機種不明）
	２区（祖納）要塞重砲兵第２中隊（北村隊）	38式野砲×４門 探照灯×１基
	３区（外離島）要塞重砲兵第１中隊（小野隊）	斬加式12珊速加砲×２門
	４区（サバ崎）サバ崎守備隊（小野隊配下）	38式野砲×２門
1942（S17）年 ９月７日	六五要塞歩兵隊復員解消 （大本営陸軍命令679号に基づく）	
10月７日 ～ 10月11日 (住民動員時期)	大編成替えを実施、変更後は以下の通り	
	（内離島）要塞砲兵連隊本部	
	（外離島）第１中隊（小野隊）速加砲台 中洲砲台	斬加式12珊速加砲×２門 38式野砲×２門
	第２中隊（北村隊）白洲砲台	38式野砲×４門 探照灯×１基
	※　高射砲は撤去されこの後なし	
1944（S19）年 １月５日	特設警備隊船浮要塞司令部隷下になる （大本営陸軍命令914号に基づく）	部隊名209、210、226、227各中隊
３月22日	船浮要塞司令部、重砲兵連隊、陸軍病院は新設第32軍の指揮下に入る （大本営陸軍命令973号に基づく）	
５月15日	要塞重砲兵連隊「重砲兵第八連隊」に改称	
６月１日	船浮要塞司令部は復員解消。船浮陸軍病院、重砲兵第八連隊、特設警備隊は独立混成四十五旅団の指揮下（在石垣島）に入る	
９月２日	石垣島移動のため部隊再編成 （外離島）第一中隊　隊長小野大尉 （石垣島）第二中隊　隊長鉄田中尉 （石垣島）第三中隊　隊長安岡中尉	斬加式12珊速加砲×２門 38式野砲×３門 38式野砲×３門（２門は第一中隊より、１門は第二中隊より） 探照灯×１基
９月８日	第二中隊、第三中隊石垣島へ移動	

２門、展望哨、兵舎、兵器・弾薬庫、桟橋の設備があるということである。展望哨はその後の日記の記述（18年４月21日、18年12月８日）からも149高地にあることがわかる。陸軍はその海抜高度の名称で呼ぶことがあるので、そこから推測すると、外離島の一番高い場所に置かれたと考えられる。鉄田氏の書いた地図の信憑性を問うことは困難であるため、この速射加農砲台については言及することは難しい。ただし「設置された野戦重砲」というキャプションの写真（写真７）は、「斬加式十二珊速射加農砲」であると思われる。

「斬加式十二珊（糎）速射加農砲」は、「シュナイダー・カネー式12センチカノン砲」と読み、「フランスのシュナイダー社制速射砲である。九糎速射カノン砲とともに明治31年３月に購入契約が結ばれている。砲身はともに鋼製であった」[17]もの（写真８）で、日記の記載通り、「海上からも上空からも発見出来る古い時代の備砲形式であった」[18]。そのため「この砲を取り扱った兵士は既教育兵の中に誰も居なかった。下士官も然りである」。



設置された野戦重砲

写真７．鉄田日記巻頭写真より

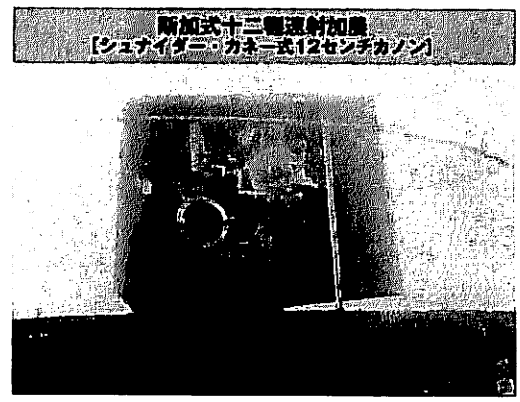


写真８．『歴史群像シリーズ日本の要塞』p.118より

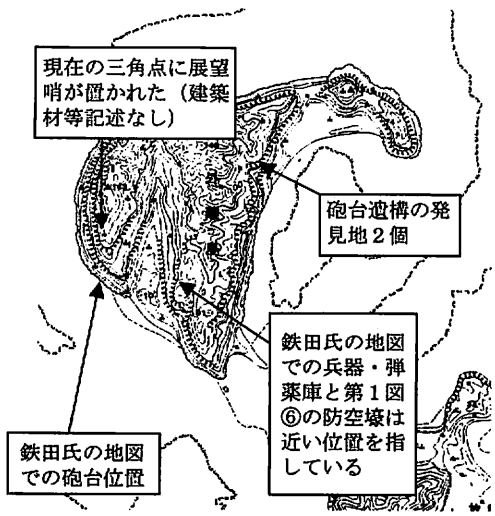


図３．外離島初期配備予想図
（国土地理院2500分の１を元に作成）

今後、この備砲の陣地構築に関する資料を発掘することができれば、この砲台跡が間違いなく、十二速加砲のものと確認することもできるであろう。

⑥の人口壕（写真９－10）は、今回の調査で［伊波・山本2006］を確認する形で望んだ。この壕は貫通壕であったため、一見兵器・弾薬庫には不向きかもしれない。しかし、その後の拡張も考えると、弾薬庫であるという可能性も捨てることはできないであろう。

これらの状況を再度確認することができれば、初期段階の構築物を分類することができるのではないだろうか。しかし、後述する通り、陣地構築並びに砲台建設は引き続き実施されているため、その活用の盛衰を見極めていかなければ

[17] 長谷川晋編集『歴史群像シリーズ日本の要塞』学習研究社2003　P.118
[18] 竹富町史編集室　前掲　p.42。

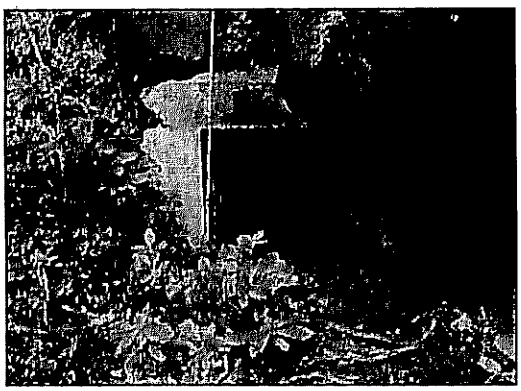


写真９．人口壕西側入り口

写真10．人口壕北東側入り口

その全体像を明らかにすることは難しいと考えられる。

なお、内離島の砲台跡が［伊波・山本2006］で紹介されているが、現時点ではこれは、「斬加式十二珊速射加農砲」ということは難しいのではないかと考えている。それは、日記を読んだ限りの資料では、内離島に「十二速加砲」が配備されたという記述が存在しないこと、17（1942）年11月11日の作業に「外部にあっては高射砲の卸下作業使役等」と外離島概でなおかつ第一中隊外であること、18（1943）年月27日の記述（この時点では連隊本部付で内離島に配備）に、「旧高射砲陣地へ登って見ようと（中略）標高百五十米の頂上に草に覆われた陣地と兵舎跡がさみしく残っている」という記述があり、その後高射砲に関する記述はなく、野砲の対空射撃設備へと変わっている。そのため歩兵隊の中に高射砲隊がいたのか確証はつかめないが、内離島は高射砲一門のみの装備の可能性を視野に入れておくことは意味があるだろう。

祖納地区（第二中隊）は、配備通りの砲台跡なので、確定できると思われる。

サバ崎地区（サバ崎守備隊）の砲台に関しては、もう一門三十八式野砲の砲台があるはずである。また、今回発見したものについても、祖納のものと同型かどうか、その規格について検証をすることが必要であろう。

② 編成替えし外離島への集中期
（1942.10～1944.９）

次に②であるが、新編成の実施は以下のような内容で実施された。

・祖納地区第二中隊は、外離島北岸に陣地兵舎共に移動
・サバ崎地区サバ崎守備隊は、外離島南岸に陣地兵舎共に移動
・祖納地区の探照灯は外離島に移動
・中隊規模を235人から105人に削減
・高射砲の移動

この編成により新たに構築されたのが、通称、中洲砲台と白洲砲台である。中洲砲台は、第一中隊の管轄でサバ崎からの移動であり、白洲砲台は第二中隊の移動である。

この時点で外離島には、八つの砲台が構築されることになったのである。半数に減った兵隊の中での陣地構築ということで、住民が動員されたと日記は記している。それまでは、炭鉱夫による奉仕隊の参加は日記の中に散見することができるが、この時期（17（1942）年10月21日～11月５日）から住民の奉仕隊が参加、これら六つの砲台（白洲砲台の四つ、中洲砲台の二つ）及びそれに関わる陣地構築に動員されたものと考えられる。

①に白洲砲台があったとすると、［伊波・山本2006］において、四つ見つかった擬砲はこれらの跡を擬砲化したという推測も成り立つ。日記では、「最近中洲砲台下まで船が通うことが出来るようになった。従って、白浜も内離も、船浮湾を外廻りをせずに行くことが出来た。然し遠浅のため必ず伝馬船が必要であった」（18（1943）年１月１日）とあり、点線のようなルー

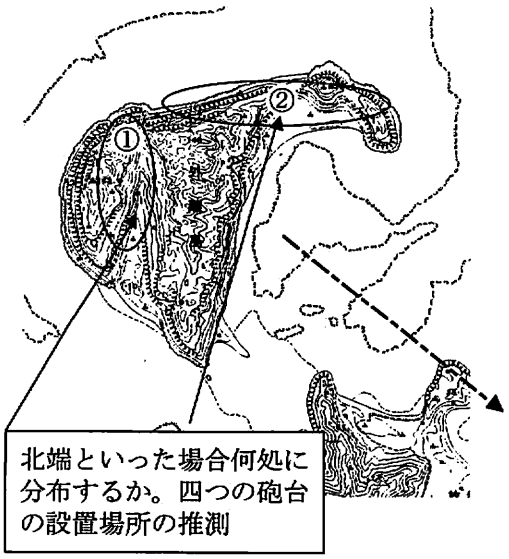


図４．外離島編成替え予想図
（国土地理院2500分の１を元に作成）

トができたとするならば、②が中洲砲台ということになる。しかし、現在十二速加砲の砲台とされているのは、②のエリアでありこれに関する整合性もとれていない。引き続き検討が必要であると思われる。

作業は18（1943）年３月22日に、「二区、四区共外離地区に集結を見た日であったが、この日は特に暑さも厳しく、全員上半身を裸に白洲砲台弾薬運搬に急坂の往復七、八回流汗淋漓、たくましい兵の体躯に今更ながら感心させられた」とあり、部隊と移動が完了する、砲台の基礎工事が終了したものと考えられる。この時には中洲・白洲砲台と外離南端海岸伝いに道路を構築する作業も実施している。

その後、日記18（1943）年12月14日付に、「北村隊への総出作業で、午前中に探照灯の運搬…」、19（1944）年１月５日付「今日愈々、探照灯陣地の構築にかかる事とす」と12月に第二中隊の中隊長になった鉄田氏の陣地構築の課題にこの陣地設置があり、同年1月12日には、「探照灯陣地を巡視。正午、福盛大尉と野原少尉が来隊し再び陣地に案内す。海岸から此の陣地まで砂、砂利、水を運んでコンクリート作業をする様は実に悲壮なものだ」と述べ、探照灯陣地がコンクリート構造であることを示唆している。探照灯、いわゆるサーチライトとは、暗闇の中敵艦を照らし出すものである。後述するが、対馬の豆酘崎には大きな探照灯格納庫が存在していた（写真11）。下の写真の格納庫から、レールがありそのまま運んで照らすことができるようになっていた。

これらの情報を総合し、再度砲台の位置づけをし直すことで、より確証高い形で陣地の実態をつかむことができるであろうと考えられる。

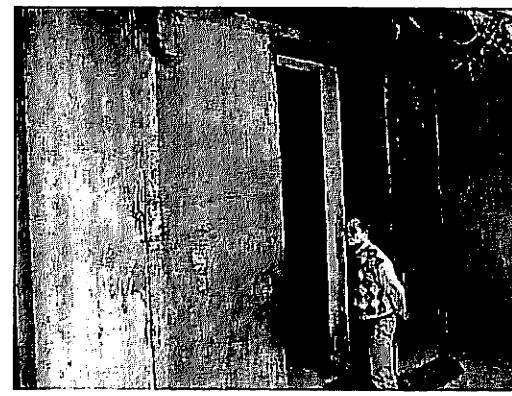


写真11．豆酘崎の格納庫跡（2006撮影）
形状が同様のものはないが、ライトを格納するような陣地構築があったろうと推測できる。

③　小野隊を残し石垣島へ移動（1944.９～敗戦）

その後、石垣島に駐屯した独立混成第45旅団の作戦計画に伴い、この要塞はその性格を大きく変えることとなる。移動を前に、19（1944）年４月４日、「突然連隊長よりまた直接電話あり。射撃当分中止。高射砲座、掩護所、偽陣地の構築に総出作業実施せよ」という命令があり、それ以後、偽陣地構築、偽装の作業を兵隊は行うことになるが、この時期にも「勤労奉仕隊」が作業をしに来る様子が日記に登場する。そのため、この一連の作業には住民も関わっているものと思われる。偽陣地は祖納にも構築されている。

９月２日には、石垣への転進（移動）を前提に、これまでの第一、第二中隊を、三つの中隊に分割することになり、第一中隊小野大尉、第二中隊鉄田中尉、第三中隊安岡中尉がそれぞれ指揮をとることとなった。正確な配備は分からないが、日記19（1944）年９月２日に「小野隊は速加砲台を担任し西表守備隊として残置し、

鉄田隊、安岡隊は、純然たる野戦重砲として石垣に転進す」とあるため、第一中隊は、速加砲二門のみになったものと考えられる。翌日には、「探照燈と火砲一門を申し渡す」とあり、この記述からは、新設の第三中隊に渡ったものと考えられ、38野砲はすべて石垣島へ移動したと思われる。

見てきたように、要塞には、部隊配備の変遷があり、それにより砲台跡そのものが実際に使われたものか偽陣地だったのかなど、検証をすすめることで、より具体的に要塞の全体像を明らかにすることができるだろう。しかし船浮要塞において、部隊が集結しなかったサバ崎、祖納は、その後教育隊や監視所の設置、特別警備隊の陣地等に活用されている。また、宇那利崎にも監視所が置かれるなど、監視態勢や歩兵に相当する部隊の駐屯は増加していく。このあたりについては、日記では触れられていないため、具体的な構築内容など分析することはできなかった。また、船浮要塞とも大きな関わりがあるはずである海軍基地について触れられなかった。新たに追加した崎山の監視所、船浮集落の海軍陣地とあわせて分析することで、「西表島の戦争」がより明らかになるだろう。

また、住民の奉仕隊など、徴用や学童・青年会等の動員の状況について触れることもできなかった。今後、「竹富町史住民体験記録」との照合も実施し要塞建設・運用の実態についても引き続き調査・研究が求められている。

5．対馬における戦争遺跡の現状

(1) 対馬の地理的重要性

対馬は、朝鮮半島との距離がわずか49.5kmという地理的特性のため、古代から朝鮮半島・大陸との往来が盛んである。それは、友好的な交流ばかりではなく、時に、攻撃的な意図を持った侵入が相互に行われることもあった。中でも、1274（文永11）年の蒙古襲来は、その恐怖とともに、現在でも人々に語り伝えられているほどである。

このような「国境の島」としての対馬の重要性は、近代国家として欧米列強の東アジアへの進出に対抗すべく、富国強兵を重点的に推し進めた明治になると、ますます高まることになる。すなわち、朝鮮半島からの近さに加えて、日本海と東シナ海とを結ぶ位置にあるという戦略上の重要性が強く認識されるようになったからである。そのため、明治中期から第２次世界大戦の時期に、３期にわたって、対馬には多数の砲台が建設された。

当初、1872（明治５）年に軍隊が駐屯して以来、明治10年代末までの対馬防衛は、対馬が外国軍の本土侵攻の足がかりとならないように、対馬そのものを防備するものにすぎなかったと考えられる。しかし、1885（明治18）年の英国軍艦による巨文島占領、対馬海峡へのロシア進出の動き等によって、「海峡地域を制する日本艦隊の前進根拠地としての新たな重要性が高まる」[19]に至った。そこで、大日本帝国艦隊の前進根拠地として最重要拠点となる浅茅湾を防護するための砲台が建設された（第１期）。この時期に造られた砲台は、温江、大石浦、芋崎、大平の４カ所である。

さらに、1895（明治28）年、日清戦争が日本の勝利で終結すると、浅茅湾の重要性がますます高まったことなどから、翌1896（明治29）年、竹敷に海軍要港部が設置され、また、1897（明治30）年には、陸軍対馬警備司令部が厳原から雞知に移転、さらに、1900（明治33）年には、対馬要塞砲兵隊も雞知に移るなど、軍の再編成が実施される。さらに同年、万関運河が開削されて、浅茅湾と対馬東水道とがつながった。このような状況の中で、浅茅湾周辺に13の砲台が建設されたのである（第２期）。すなわち、四十八谷、大平（高）、城山、城山附属、上見坂、根緒、根緒附属、姫神、折瀬、大山、郷山、多功崎、樫岳がそれである。

その後、1905（明治38）年に日露戦争が終わり、ロシアから関東州や南満州鉄道の権益を譲り受けるなどし、さらに、1910（明治43）年に

[19] 大山甫「対馬近代防衛史小考」『対馬の自然と文化　第16集』P.333

韓国を併合した日本にとって、大陸への交通路を確保することが最重要課題となる。それに伴い、対馬の戦略上の位置づけも、「浅茅湾防護よりも、北の鎮海要塞、南の壱岐要塞とともにその最中軸として海峡全域を要塞火砲の制圧下におく目的のもの」[20]へと変化した。それに伴い、大正から昭和初期にかけて、10の砲台が建設された（第３期）。竜崎第一、豊、竜崎第二、棹崎、海栗島、御崎、大崎山、西泊、竹崎、豆酘崎の各砲台がそれにあたる。

そして、第２次大戦の敗戦の結果、米軍の指示により、対馬の砲台は、1945（昭和20）年10月には、すべて武装解除された。

(2) 本調査の目的

上述したように、対馬の砲台は、３期にわたって、建築整備されてきた。本調査は、そのうち、第３期に建築された砲台群を中心に実施した。その理由としては、第一に、平和教育に資するための教材開発が目的であることがあげられる。現在の児童・生徒にとって、もっとも身近なものとして追体験が可能といえるのは、先の大戦であろう。戦後60年以上が経過した現在において、直接体験した話を聞けるのは、もはや先の大戦以外、ほとんど不可能である。宅地の開発等で当時とは状況が大きく変わっていたとしても、話を聞き、想像力を働かせることによって、当時を思い描くことができるのは、何かしら手がかりがかろうじて残っている可能性が高い第３期が、限界ではないだろうか。

第２の理由として、その教育的な必要性にも関わらず、第３期についての先行研究がとくに乏しいように見受けられるからである。小松津代志氏の『対馬のこころ』には、日露戦争に関連した戦跡が広くとりあげられているが、対馬沖海戦100周年の記念誌という性格から、第３期の砲台については、ほとんど扱われていない。また、大山甫氏「対馬近代防衛史小考」や御手洗康永氏『対馬要塞司令部小史』などには、砲台の建設経緯等については詳しいものの、その現状については、ほとんど触れられていない。一方、対馬の戦跡の現状については、長崎県教育委員会『長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－』が、調査結果をまとめている[21]。この報告書によって、全３期にわたっての砲台の現状を概観することができるが、第３期については、５カ所を扱うにとどまっている。

以上の理由から、第３期の砲台について、現時点での状況を確認することは、特に平和教育という視点からも、重要な意義があると考える。全３期の砲台の中でも、第３期は比較的新しいため、他の２期のものに比べて、保存状態もよいことが期待できるのではないか、という点も、付加的な理由といえよう。

(3) 対馬の第３期砲台の現状

第３期に造られた砲台は、野砲も含めると、南・北・中部にわたって、次の合計13砲台である。ただし、竜崎は、時期を前後して２砲台が建設されたが、便宜上、１カ所にまとめることとする。

北部
①棹崎砲台
②海栗島砲台
③豊砲台
④西泊（殿崎）砲台
⑤臼崎砲台

中部
⑥小松崎砲台
⑦郷崎砲台
⑧竹崎砲台
⑨折瀬ヶ鼻砲台

南部
⑩豆酘崎砲台

[20] 大山・前掲P.336
[21] 長崎県教育委員会『長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－』1998、P.159-162

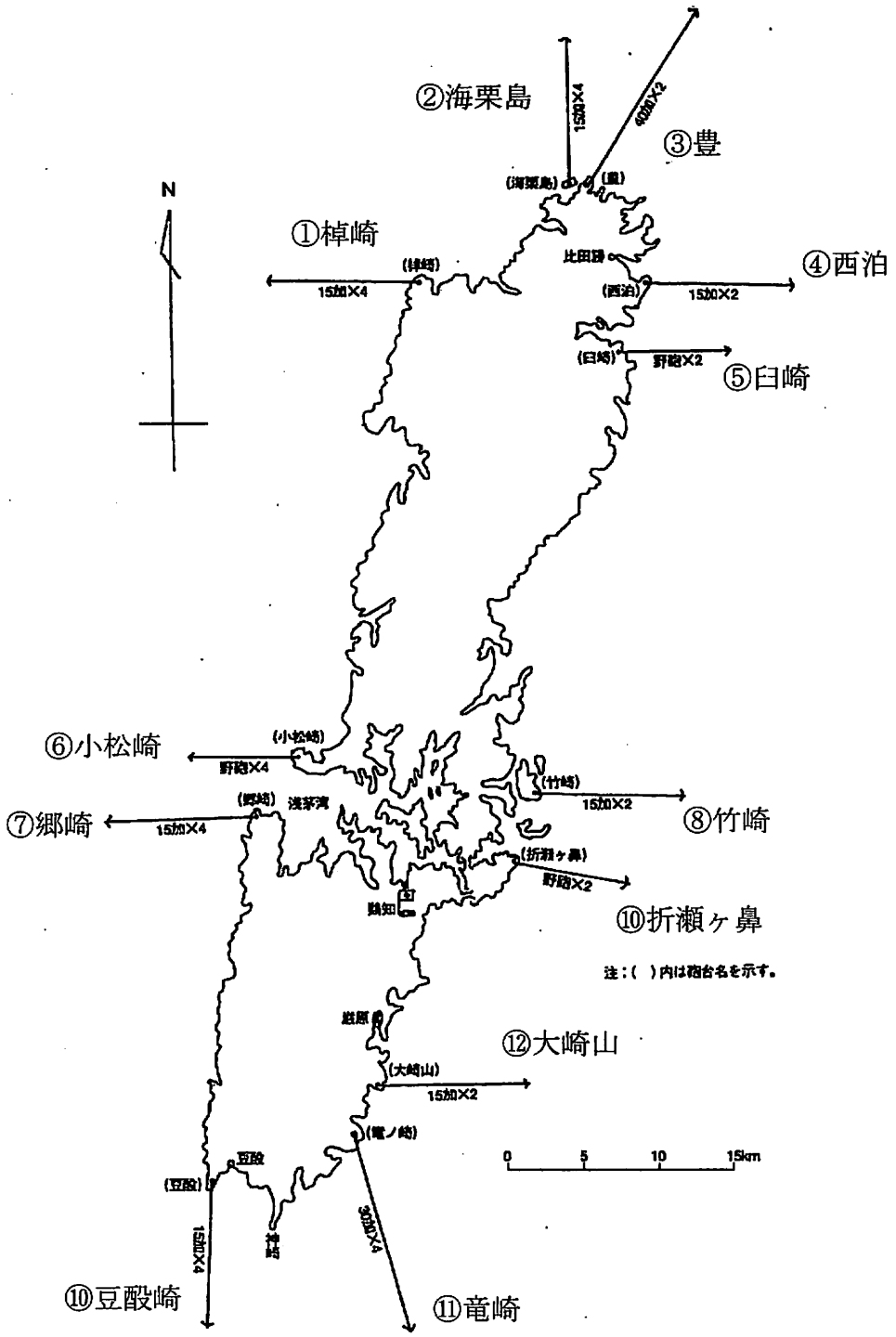


図５．対馬における昭和16年末砲台配備状況

出典：対馬要塞重砲兵連隊会『対馬要塞重砲兵連隊史　壱岐要塞重砲兵連隊史』p. 47. ただし①棹崎～⑫大崎山は、筆者が付記した。

⑪竜崎第１、第２砲台
⑫大崎山砲台

これらのうち、①棹崎、③豊、⑦郷崎、⑩豆酘崎、⑪竜崎第一、の５砲台については、前述した長崎県教育委員会の調査報告書[22]に現況写真とともに記述されているため、重複する部分もあるが、ご容赦願いたい。

なお、調査期間が限られていたこともあり、今回、確認できなかったものも少なくない。

北部

① 棹崎砲台（写真12－13）

15センチカノン砲４門が配備され、第３中隊約150名が駐屯した[23]。現在は、棹崎公園として整備され、砲座跡を利用した芸術作品などが置かれ、人々の憩いの場となっているが、観測所や施設の石垣等、広い範囲にわたって遺構を確認することができる。

写真12. 観測所の中から海峡を望む

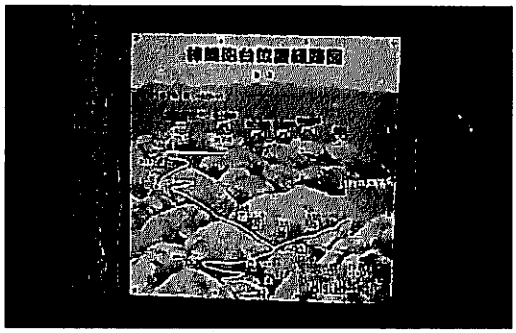


写真13. 棹崎砲台跡の全体図

② 海栗島砲台（写真14）

15センチカノン砲４門が配備され、第２中隊の主力約150名が駐屯した。現在は、海上自衛隊のレーダーサイトとなっているため、立ち入ることはできないが、手前の韓国展望所からその位置を確認することができる。

写真14. 韓国展望所から望む海栗島

③ 豊砲台（写真15－16）

40センチカノン砲２門が配備され、第１中隊

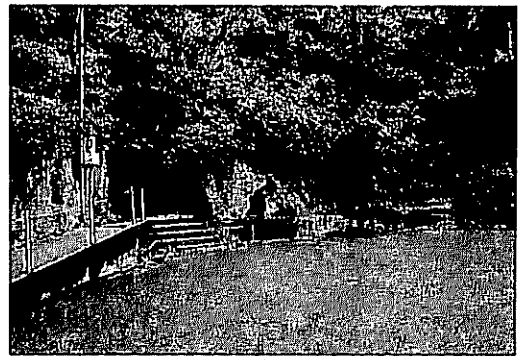


写真15. 豊砲台跡の入口付近

写真16. 豊砲台の台座下部から空を仰ぐ

[22] 長崎県教育委員会・前掲、P.161-162
[23] 砲台の砲種・門数、部隊名・兵力数は、主として、対馬要塞重砲兵連隊会『対馬要塞重砲兵連隊史』に拠った。以降の各砲台についても同様である。

主力約200名が駐屯した。現在、台座・地下室・兵舎などの砲台施設が保存整備されており、当時の状況をもっともよく知ることができる施設となっている。

④　西泊（殿崎）砲台

15センチカノン砲２門が配備され、第２中隊の一部約80名が駐屯した。現状は未確認であるが、現在は、日本海海戦記念碑（写真17）や日露慰霊の碑が立つなど、日露友好の丘となっている。

また、その手前の、藪の中を分け入った先にある小高い丘の上に、観測所跡と思われる遺構が残っており、現在は「電波塔」の土台として利用されている（写真18）。

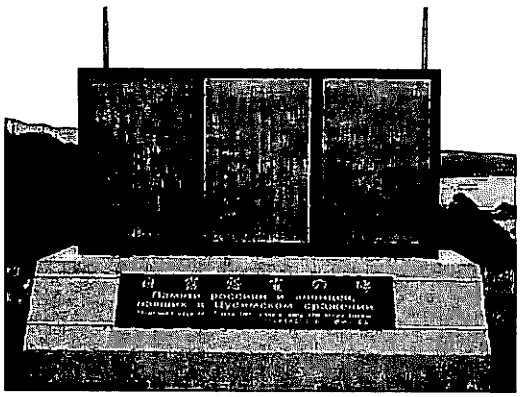


写真17. 日露慰霊の碑

写真18. 観測所跡（左上部が「電波塔」）

⑤　白崎砲台

野砲２門が配備され、第１中隊の一部約60名が駐屯した。現状は未確認である。

中部

⑥　小松崎砲台

野砲４門が配備され、第５中隊約80名が駐屯した。現状は、未確認である。

⑦　郷崎砲台（写真19－20）

15センチカノン砲４門が配備され、第４中隊約150名が駐屯した。現状は未確認であるが、手前の郷山に置かれた第２大隊本部約30名を合わせた駐屯地の跡が残っている。ただし、一部は自衛隊の敷地内となっているようである。

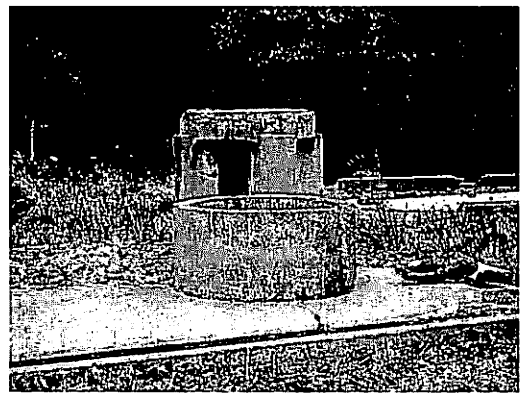


写真19. 兵舎跡と思われる

写真20. 施設の石垣が一部残る

⑧　竹崎砲台

15センチカノン砲２門が配備され、第６中隊主力約80名が駐屯した。現状は未確認である。

⑨　折瀬ヶ鼻砲台

野砲２門が配備され、第６中隊の一部約50名が駐屯した。現状は未確認である。

南部

⑩　豆酘崎砲台

15センチカノン砲４門が配備され、第８中隊約150名が駐屯した。現在は、豆酘崎の灯台を中心とした自然公園の中にあり、探照灯格納庫の一部が残っている（写真21）。

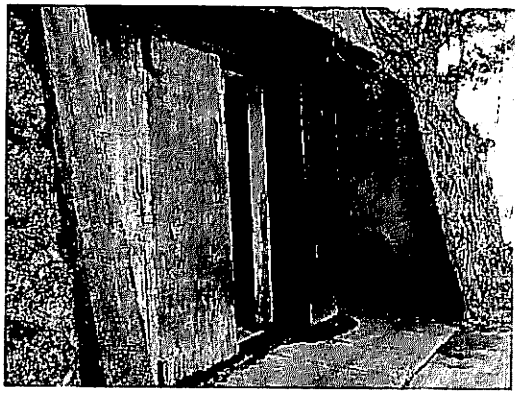


写真21. 探照灯格納庫入口の頑丈な扉

⑪　竜崎第１、第２砲台（写真22－23）

写真22. 砲台への入口

写真23. 砲台跡を上からのぞく

30センチカノン砲が２門づつ、合わせて４門が配備され、第７中隊約250名が駐屯した。現在は、砲台跡が一門だけ残っているが、それも藪の中に埋もれており、早急な保存整備が望まれるところである。

⑫　大崎山砲台

15センチカノン砲２門が配備され、第９中隊約80名が駐屯した。現状は、未確認である。

(4)　今後の課題

本調査により確認できたのは、第３期に建設された砲台12カ所（竜崎第１、第２を１カ所と数える）のうち、保存整備されている砲台が、豊と棹崎の２カ所のみであり、未整備のまま放置されている砲台が竜崎１カ所である。その他、砲台は未確認であるが、何らかの関連した施設の遺構が残っている砲台が、西泊・郷崎・豆酘崎の３カ所であり、残りの６カ所は未確認である。

したがって、まずこの未確認の砲台について、現状を確認することが必要であろう。ただし、海栗島については、自衛隊基地となっているため、現時点では不可能である。

さらに、対馬における戦時下の生活について、とくに銃後のそれがどのようなものであったのか、について、明らかにする必要があろう。残念ながら、その要求を満たすような文献はほとんど存在せず、そのためには、戦争体験者からの聴き取り調査を行わなければならない。それも、できるかぎり早い時期に行う必要がある。そのような調査を実施する中で、「国境の島」であるが故の特異性が自ずから見えてくることが期待される。それが、現在の国際交流を勧めるうえでも、何らかの示唆を与え、国際理解を育むうえでも、大いに役立つのではないであろうか。

過去の戦争を学ぶことが、現在、そして未来へ向けた国際交流につながっている、そのような教育の可能性を、国境の島だからこそ構想できると考える。

6．まとめ

今回、西表島、対馬の戦争遺跡の調査研究を通じ、保存・活用という点で、文化財指定による調査研究等が県・自治体の中で進んでおらず、平和教育の素材として充分整備されていないことが明らかになった。しかし、これらの戦争遺跡は、過去の戦争体験を語る“モノ”として、大きな価値を持っていることも見えてきた。まずは科学的な実態調査からはじまり、そこに生き・死んだ人々の経験を重ね合わせることで、平和教育の素材として、子どもたちに「戦争とは何か」を問いかけるものになりえるはずである。その土台となれば幸いである。

［橋本・山口・全2006］で指摘したように、離島における教員の任期は２～３年と短い。教師の教材研究の成果は、学校に蓄積されにくい。そのような中で、「西表島の戦争」のような授業書と住民体験記録を併せ持ったデータを整理し蓄積していくことは、沖縄戦研究を深めていくこととともに、平和教育の深化をつくりあげることになると言える。そのためには、学校現場においても活用しやすいデータ、地図によるマッピングや写真・映像による図解、証言の整理や文献リスト、モデル教材など、これまでの研究をわかりやすく整理することが求められている。

離島・へき地に赴任してすぐにでも、教師が子どもとともに現場を歩き、その現場で起こったことを体験者の証言から読み合わせ、ともに過去の戦争に触れる学習は、「子どもたちが活動する中で平和の大切さ」を考える平和教育づくりの第一歩になるものと考えられる。そうすることで、最初に取り上げた平和教育の課題にも応えることができるだろう。

本研究は、2005～06年度文部科学省特別教育研究経費措置事業「新しい時代の要請に応える離島教育の革新（長崎－鹿児島－琉球、三大学連携事業）」により行なわれたものである。

参考・引用文献

石垣市市史編集室編『市民の戦時戦後体験記録第一集』石垣市役所1983

石垣市市史編集室編『市民の戦時戦後体験記録第二集』石垣市役所1984

伊波直樹・山本正昭『西表島・船浮要塞跡の実態と現状』紀要沖縄埋文研究4号　沖縄県埋蔵文化財センター2006　p.81-104

大山甫「対馬近代防衛史小考」『対馬の自然と文化　第16集』1988

沖教組八重山支部西表連合分会社会科分科会「第5次西表地区教育研究集会資料『西表の戦争　第1集』」1985

沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅰ）―南部編―』沖縄県立埋蔵文化財センター2001

沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅱ）―中部編―』沖縄県立埋蔵文化財センター2002

沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅲ）―北部編―』沖縄県立埋蔵文化財センター2003

沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅳ）―本島周辺離島及び那覇市編―』沖縄県立埋蔵文化財センター2004

沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）―宮古諸島編―』沖縄県立埋蔵文化財センター2005

沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅵ）―八重山諸島編―』沖縄県立埋蔵文化財センター2006

沖縄国際大石原ゼミナール・戦争体験記録研究会『もうひとつの沖縄戦―マラリア地獄の波照間島―』ひるぎ社1983

「沖縄に学ぶ」フォーラム in NAHA2006実行委員会企画・製作『命どぅ宝の島から　証言でつづる沖縄戦の真実』DVD　同委員会発行2006

小松津代志『辺要　対馬・壱岐防人史』対馬警備隊2000

小松津代志『対馬のこころ』2005

十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房2002

城間良昭『船浮要塞に関する手記』地域と文化第40、41合併号　ひるぎ社　1987

戦争遺跡保存全国ネットワーク編著『保存版ガイド　日本の戦争遺跡』平凡社2004
竹富町史編集委員会編『竹富町史第十二巻資料編戦争体験記録』竹富町役場1996
竹富町史編集室『竹富町史資料集①鉄田義司日記―船浮要塞重砲兵連隊の軌跡―』竹富町役場2000
田港朝昭編『平和教育実践選書４　沖縄戦と核基地』桐書房1990
対馬要塞重砲兵連隊会『対馬要塞重砲兵連隊史』1995
対馬重砲兵連隊会『守りの思い出』2001
長崎県対馬支庁『つしま百科』2005
長崎県教育委員会『長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－（長崎県文化財調査報告書第140集）』長崎県教育委員会1998
橋本健夫・山口剛史・全　炳徳『離島及び僻地の小さな学校から始める平和教育』　南太平洋海域調査研究報告45号　2006
防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社1968
防衛庁防衛研修所戦史室著「戦史叢書沖縄方面海軍作戦」朝雲新聞社1968
御手洗康永『小さな従軍記「対馬要塞司令部の終焉」』1994
御手洗康永『対馬要塞司令部小史』1996
和光小学校・和光鶴川小学校「沖縄に学ぶフォーラム2006」委員会編『沖縄に学ぶ子どもたち』大月書店　2006
渡邊博至『硝煙の北対馬』清文堂1995